

常なる磐

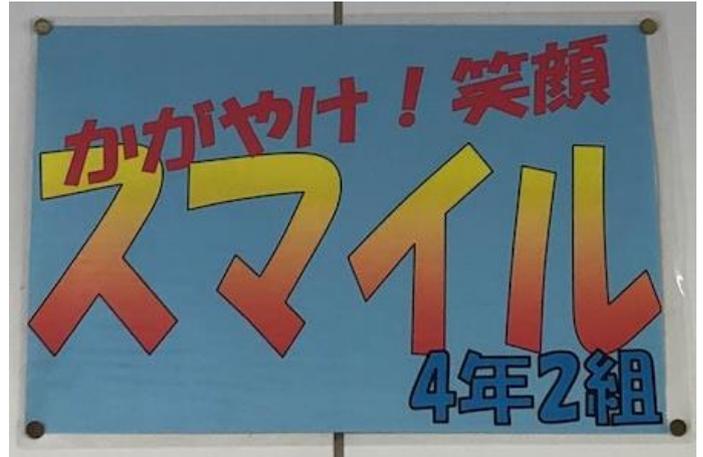
つねなる いわ season II
令和3年5月7日(金)
その2

◇ 学級訓に想う その③

☆5年1組 ▼「みんなだから10歩」



☆4年2組 ▼担任も児童もいつもスマイル



「学級訓に想う」最終回（その③）は、私の回顧録。

担任を授かった最後の8年間のうち、7年は同じ学級訓【力の限り】である。毎年同じ学級訓にするのには理由がある。経験を重ねる中で、学級づくりの「核」「軸」が明確となり、ブレブレだった指導の方向性が固まったことに他ならない。『これだ。』と辿り着いたのが、学級訓【力の限り】というわけだ。



【力の限り】の意味は、「備える力をすべて傾けて」。
2字熟語なら「全力」や「総力」、「本気」、「尽力」、そして慣用句なら、「勤儉力行」や「粉骨砕身」などがあてはまる。

しかしながら、いずれも固い。身が引き締まるというよりも、肩に余分な力が入る。

その点「力の限り」は、「かな」が混じることで柔らかさが加わり、この柔軟さによって、あらゆる場面・行動に結び付けられる。



例えば、「学習に力の限り」「部活動に力の限り」。

「力の限り」は文武両道なのだ。

場面を絞り込めば、より具体的な頑張り目標になる。

「授業発言に力の限り」「テスト勉強に力の限り」という具合。

子供たちが頑張る行事にもびったり。「体育大会に力の限り」「合唱に力の限り」。場面を切り取れば、「全員リレーに力の限り」「応援に力の限り」「行進の限り」。「蒼鷺（合唱曲名）に力の限り」「ブレス合わせに力の限り」。何でもござれだ。

接尾だけではなく、接頭として扱えば、口語体となる。つまり語りである。

『力の限り勉強しよう』『力の限り応援しよう』『力の限り練習しよう』

文武両道。何でもござれ。

活動・言動・所作仕草・礼節すべてに通じる、ぶれのない「柱」なのだ。

しかし、最後の8年間のうち、一度だけ、学級訓を変えた。

平成20年度、中3を担当した時の学級訓は【全】。



もち上がりの学年なので、何らかの形で話は伝わっていくもの。1・2年生の担当学級の学級訓は「力の限り」で、学級の子供たちの誰もが『今年も学級訓は力の限り』だと思っている中で提示したのが【全】。

学習課題「3年8組 学級訓【全】に込められた意味」として授業参観で子供たちに投げかける。

グループ内討議。おもしろい考えがわんさかとお出る。

「けれども、私の真意は当てられるまい…」と思っている中、渾身のど真ん中の剛速球を、一人の生徒に見事に叩き込まれた。スタンド場外にである。お見事。

「僕たちの班の考えを発表します。『【全】は学級』を表しています。とは言っても、どの学級にも通用するものではありません。この3年8組だからこそ言えます。」と、ホワイトボードを使って説明が始まる。

「まずは漢字【全】を上下に分解します。そうすると「やまかんむり」（※これは間違い。正しくは『ひとやね』）と「王」になります。さらに「王」を分解します。すると、漢字の「三」と「縦棒」になります。そして「やまかんむり（ひとやね）」のつながっていると所を少し離すと、漢字の「八」になります。（ここで子供たちと保護者がざわつく）つまり、【全】は『三一（の）八』。余分なものも足りないものもない純粋な『3年8組』という意味です。」生徒M男の明快な説明に、保護者からは拍手喝采。

私が伝えれば、「なるほど」で終わる。しかし、子供が言い当てることで一気に浸透する。実はこの時期、漢字の分解に凝っていた。表の下の写真「限」に2つの「8」があるのは、2—8という意味。そして【全】は、元2—8の生徒が言い当てた。「やられた」というよりむしろ『よくぞ辿り着いた』と私も大拍手した昔の記憶。担任と子供たちの思いが重なってこそ、学級訓は初めて本物となる。